

この小径

大庭みな子

その小径のことをなぜそんなによく覚えているのであろうか。

私は十四歳だった。終戦の日もその小径を喘ぎながら登った。

喘ぐほどの急な坂道の途中に、窪みのように中休みする場所があった。

山間の谷間に片側の山を削ってつくられたその坂径はそこで折れまがっていた。頭の上に張り出した枝が涼しい茂みをつくっていて、私はいつもそこでほっと一息入れた。

左側の森もその場所はわずかな台地になっていて、そこに一軒の小さな家があった。その家には老いた顔色の悪い女と、青白くすき透った肌の若い女が住んでいた。

叢を分けるようにしてその台地続く土手を薬瓶を持った青黒い肌の老婆が這い上るようにしてゆく後姿や、高い台地から見下

ろすようにきつい光の眼を真っ直ぐに向けて降りてくる青白い肌の若い女に、その窪地でときどき出遭うことがあった。

その家の後ろは再び谷に陥ち込むように昼でも暗い深い森があつて、その森の中に小さな黒い沼があった。その沼にはじゅんさいという寒天のような透明な雫を茎と葉のまわりにつけた水草が自生していた。私は一度友人に誘われてそのじゅんさいの芽を摘みに行ったことがある。

その沼に行った帰り途、私たちはきつい光の眼に射すくめられて立ちすくんだ。黒くなめらかな娘の髪は、沼の水をしたたらせているように見えた。まゆみや合歡の枝から洩れる陽が、黒い水の上にきらめいて踊る沼の中からその娘は生まれたのではないかと思えた。沼の主に見とがめられたように思えて、私たちは二度とその沼を訪れなかった。

私はその娘と一度も口を利いたことがないのに、なぜかその刺すような光の眼でみつめられるだけで、妙な怯えでからだがすぐんでしまうのだった。そして、娘の住む家のことがいつも気にか

かっていた。

小さな台地の家は木立ちに囲まれて、下の坂径からは屋根しか見えなかった。

十八、九のその娘は白く光った高い額と、鋭利な刃物で深くそいだようなきつい光の眼を持っていた。

坂径がその家の下にさしかかると、ときどききしんだつるべを手繰る音が聞こえた。その辺りの井戸は、覗き込むと遙か彼方の世界に続く小さな窓のように、水の光が見え、苔の匂いとひんやりした空気が顔を撫で、吸い込まれてしまうように思えるのだ。た。

その深い井戸から汲み上げるつるべの音は、長くいつまでもゆつくりと続いて、私がその坂を歩きすぎるまで止まらぬこともあった。

その村ではどの井戸もそんなふうに気が遠くなるほど深かったから、山間を流れる沢に腰を下ろして洗いものをしたり、米をといだりしている女の姿がよく見られた。沢蟹が遊び、目高が泳い

でいる流れの早い沢の水は夏も氷のように冷めたく澄んでいて、笹舟を流すとあつという間に走り去った。

おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へせんたくに、といった物語がある里の姿だった。

夏の宵、つるべの音の聞こえるその径を通ると、木立ちの間からうすい煙が立っていることがあった。野天風呂があるらしく、水を使う音が聞こえ、あるとき、木の繁みのわずかなすき間を、娘の白いからだがよぎった。馨しい森の精のひそかな沐浴を垣間見た嬉しい気分になり、私は娘の刺すようなきつい光の眼を甦えさせ、足早にそこを通り過ぎた。

その坂の上の山間には、まだ何軒かの家があったから、その坂径を登るのは私のような少女ばかりではなかったろう。私はその窪地に身をひそめて眼をこらす人の姿を想い描いた。

私は坂径を登るたびに、つるべを手繰る音が聞こえはすまいかと耳を澄ますようになった。うすい煙が立ってはいはすまいかと木々の間を夕闇に透かすように見やった。そこを足早に通り返す

はしない人のことを、あの刺すような眼の光に誘われて森の中に
吸いこまれてしまう人がいるのではないかというようなことを想
った

その娘の強い光の眼と、白いからだ、水の音を、なぜ私はこ
んなにいつまでも覚えているのであろう。その坂径の情景には、
しつこい蝸の声がいつまでも嘎れてまつわたり、わびしいこお
ろぎが鳴いていたりする。螢がぼっぼつと飛び交ったりもする。
土手の曼珠沙華の血の色が明滅したりする。

終戦の日も私はその径を喘ぎながら登り、わけもなく流れる涙
を汗と一緒に拭った。

その夏の終り、女学生だった私は広島原爆投下後の後始末に
動員された。白骨と瓦礫の中で被爆者たちと十日余り過ごして、
この里に再び帰って来たとき、この谷間に群れて飛ぶ螢は無数の
人魂に見え、曼珠沙華の血の色は悪夢の鬼のかざす松明に見え
た。